一の福田である」とその効果がさらに強調されている。『梵網経』は慈悲をもっとも強調する大乗仏教の戒経であることを考えれば、看病の重要性とその効果を今までの仏典より一層強調するのは当然なことと考えられる。日本では平安期に出た最澄がこの経に説かれている戒律によって大乗戒壇を建立した。これから日本でも『梵網経』が広く読まれるようになり、看病が仏道修業の中でもっとも重要視されるようになった。

（神奈川県予防医学協会）

6 和丹両流の家格について

奥富敬之

十一世紀から十二世紀にかけての頃、京都政界においては、ひとつの傾向が顕著だった。佐藤進一氏が官司請負制と呼んだものが、しだいに成立しつつあったのである。算道を〝家業〟にした小槻氏は、弁官局を主宰する官務（左大史）の地位を〝家職〟として、官務家と呼ばれるようになった。明経道を〝家業〟にした中原・清原両氏は、外記局（少納言局）の大外記を〝家職〟にし、明法道を〝家業〟にした坂上・中原両氏は、明法博士・大判事・検非違使尉を〝家職〟とした。

また、文学を〝家業〟にした菅原氏は、侍読・文章博士・大学頭を〝家職〟とし、神道を〝家業〟にした中臣氏は、伊勢神宮・春日大社などの祭主・禰宜を〝家職〟

にした。同じく神道を〝家業〟にした花山源氏は、神祇伯を〝家職〟にし、暦法・陰陽道を〝家業〟にした賀茂氏は、暦博士・陰陽博士・陰陽頭を〝家職〟にした。武を担当する源平両氏の成立も、この頃であった。

きわめて数多くに分流した大族藤原氏においても、ほぼ同様の傾向が見られた。忠実・忠通の系統は摂政・関白を出す家系とされ、源平合戦から鎌倉初期にかけて五流に分流すると、五摂家（摂関家）と呼ばれ、清華家（英雄家）と称された。続く閑院・花山院・中院の三流は、大臣・大将を兼任できる家系とされて、「英雄三華家」と呼ばれた。下って南北朝・室町期に入ると、これに続く大臣家・羽林家・名家などの〝家格〟も、さらに設定されて行く。

このような傾向が定着して行ったなかでとくに注目されるのは、〝家業〟、〝家職〟のほかに、〝家格〟という概念も同時に、形成されていたことである。大族藤原氏が摂関家・清華家・大臣家・羽林家・名家（みょうけ）などと分流したものの、それぞれが一定の〝家格〟の称号でもあったことは、このことを能く示している。清華家にとっては太政大臣が極官であり、羽林家は参議・大納言まで昇格でき、名家は蔵人頭・大納言以上には昇れなかったのである。

もちろん〝家格〟は、官職面だけにあったものでは無かった。むしろ一般的には、位階面で見られたのである。官務家の小槻氏、大外記家の中原氏と清原氏、検非違使尉の坂上氏と中原氏などは、みな五位相当を極位とした。大学頭の菅原氏、伊勢・春日両社の祭主家だった中臣氏、陰陽頭家の賀茂氏などは、いずれも四位留まりだった。神祇伯家の花山源氏は、三位相当が〝家格〟だった。

このような情況の下で、「分（ぶん）」の意識が形成された。「分際」、「分限」、「分直」などとも云い、「随分」、「応分」などとも熟し、さらには「知足安分」などとも用いられる意識である。この意識は、〝家業〟、〝家職〟、〝家格〟という概念を基礎にして、古代末期から中世初期にかけての頃に、ようやく形成されたものだったのである。

ひるがえってこれを官医の世界で見ると、まさしく和気・丹波の両氏、いわゆる和丹両流の形成に、あてはまるように思われる。ともに医を〝家業〟にし、宮内省管

下の典薬寮の長官（典薬頭）あるいは皇后宮職隷下の施薬院の長官（施薬院司使）を〝家職〟にしていた。

しかし〝家格〟の点では、両氏の間に若干の差があった。丹波氏の極位が正四位下だったと思われるとき、和気氏で正五位上より上位に立ったものは無かったのである。

今回の報告では、いわゆる和丹両流の形成の情況と以降の様子、それぞれの〝家職〟と〝家格〟、および兼職の情況などについて、若干のことを述べたいと思う。

（日本医科大学）

7　半井本『医心方』の病名仮名訓

岩井佑泉

半井本『医心方』の仮名注、すなわちカタカナによる小字傍注を書いたのは、巻八巻首の識語の中に「初下點行盛朝臣朱星點墨假字　重加點重基朝臣朱星點假字勘物…」とあることから行盛朝臣と重基朝臣の二人であることが知られる。行盛は文章博士・藤原行盛で『金葉和歌集』（大治二年／一一二七年）に二首の歌が入選している。重基は権医博士・丹波重基で大治五年（一一三〇年）に関白の治療をした記録があるという。（杉立義一「『医心方』半井家本の一考察」京都大学人文科学研究所研究報告『中国古代科学史論』別刷。一九八九年三月、六九七頁）

仮名注は字音注と和訓注があるが、和訓注の中から病名に付せられたものをいくつか拾って検討したい。検討